

昨年5月から学校法人明治大学理事長を務める柳谷孝さん(65)は能代市出身。自らも明大OBで、野村証券副会長を務めるなど経済界で活躍してきた。学生の獲得競争が激しさを増す中、高い人気を誇ってきた明大をどう運営していくのか。任期4年の1年目を終えて感じた手応えと課題、今後の抱負を聞いた。

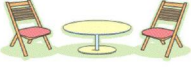
「初年度に取り組んだこと、感じたことは。」

「(東京の)駿河台、和泉、中野、(神奈川の)生田と四つのキャンパスを視察し、教職員の声を聞いて課題の把握に努めた。学生の姿を見て、社会に役立つ人材に育てなければならぬ」と改めて感じた。

「私の在学中はバンカラな校風だったが、今は学生3万3千人のうち、女性が1万人を超し、女性の活躍が目立つ大学になった。今春の卒業式では、全10学部のうち5学部の総代が女性だった。今年は応援団長が女性になった。東京六大学では初めてのことだ」

「海外からの留学生が大

あきた ラウンジ



明治大学理事長

大学ができることをやる

勢学んでいることも昔と大きく変わった点だ」
「少子化の中、大学経営をどうするか。」

「既に私大の4割は定員割れしている。明大は8年連続で受験者が10万人を超え、人気を維持しているが将来を楽観はできない。『就職に強い明大』の特長を生かしたい。全大学生にキャリア手帳を渡し、年間延べ2万8千人の就職相談に乗

人材育て古里に貢献

っている」

「グローバルな対応も必要だ。海外の350校と提携し、短期留学も含め、学生が海外で学ぶ環境を整えている。国内の受験者が減る中、海外の学生を呼ぶという視点も必要だ」

「難民学生の推薦入試もあると聞か。『国連難民高等弁務官駐日事務所と協定を結び、2011年に難民高等教育プログラムを始めた。難民学生の学費を免除し生活費も支給する。ミャンマーやア



やなぎや・たかし 51年、能代市生まれ。父の転勤に伴い、湯沢市と秋田市で小中学校時代を過ごし、青森・八戸高→明治大を経て75年野村証券に入社。97年から取締役、常務、専務、副社長、副会長など歴任。16年5月から学校法人明治大学理事長。都内住。

は最高ランクの評価だ」
「2月には秋田県と、明大の学生のAターン就職を促進する協定を結んだ。」

「地方の産業をリードする人材を育て、現在百数人が在籍する秋田県出身者に限らずAターンさせ、秋田の発展に貢献したい。明大には農学部もある」
「秋田への思いを語ってほしい。」

「難民学生の推薦入試もあると聞か。」

「国連難民高等弁務官駐日事務所と協定を結び、2011年に難民高等教育プログラムを始めた。難民学生の学費を免除し生活費も支給する。ミャンマーやア

「他に重点的に取り組んでいることは何か。」

「学生寮整備と奨学金制度の充実だ。奨学金は全学生の3割が利用している。」

仕送りの不足分を補うためのアルバイトで、地方出身学生の勉強時間が削られてはいけない。返済不要の給付型奨学金を拡充したい」

「給付型奨学金の拡充で大学経営が圧迫されないように、財務をしつかりさせるのが理事長の仕事。経営体としての健全性を示すため、4月5日には『格付投資情報センター』から『AA(ダブルA)』の格付を取得した。6段階で上から2番目で、学校法人で

「明大を創設した若き法学者3人は、山形、福井、鳥取と日本海側の県出身。建学精神の底に日本海の文化がある。困難に直面したときに黙々と取り組む気質は、秋田県民にぴったり合うのではないか」

「両親も能代市生まれの自分には秋田の血が流れている。『最後の晩餐』は比内地鶏とセリの入ったきりたんぼ、ハタハタ、稲庭うどんと秋田の地酒と決めて

柳谷 孝さん

(聞き手)中田貴彦